

「千葉氏を

語る」だより

令和2年度
第10号
発行・編集
千葉氏を語る会事務局
発行日
令和2年9月1日

千葉氏を語る会会長 向後保雄

千葉氏を語る会会員の皆様、平素より会の運営にご理解・ご協力を賜り、誠にありがとうございます。

会員の皆様の健康を第一に考え、新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から、三月から五月まで研修会の実施を控えさせていただきました。

六月六日の総会についてもご理解をいただき中止させていただきました。その後は三密を回避して研修会や現地視察を実施させていただいております。

七月二十一日には多和田城の現地視察を実施しましたところ四十名を超える多くの皆様にご参加いただきまして誠にありがとうございました。

視察での幾つかの課題もいただきましたので文化財課と協議しながら課題

解決に向けて驚見副会長と共に活動してゆきたいと考えます。

現在会員数も七十名を超え、コロナ禍の中で会員皆様への情報提供と交流の場として、会員自ら出筆と企画にご尽力いただき作成されているのが既に十号となりました「千葉氏語る」だよりでございます。会員の皆様の千葉氏関連情報の提供の場として、また会員同士の情報発信の場としてご活用頂ければ幸いです。

来年は千葉市市制百周年です。行政だけでなく市民・企業団体が主体を共有し共に考え行動する為に協議会が設立されております。千葉市役所担当課のアイデンティティ推進課では何でもかんでもという意味の千葉の方言である「あんでんかんでん」として市民の皆様からの投稿を募集しておりますので、会員の皆様もぜひ投稿よろし

くお願い致します。千葉氏を語る会としても千葉市市制百周年事業に対して何かお役に立てればと考えているところでございます。

そして、千葉常胤公の父常重が緑区大椎町から中央区亥鼻のあたりに館を構えた1126年から900年となる2026年の「千葉開府900年」の成功に向けて着実に千葉氏の歴史と功績を多くの国民と千葉市民に理解をしてもらえらるよう広報活動をして行きたいと思っておりますので、会員の皆様の引き続きのご理解・ご協力の程お願い致します。「千葉氏語る」だより十号の冒頭のご挨拶とさせていただきます。

葛西氏族の寺院再興と

千葉氏について

岩手県西磐井郡平泉町 千葉亮信

一、世界遺産毛越寺(もうつうじ)

来年2021年に世界遺産登録十年を迎える平泉には、世界遺産を構成する五つの資産がある。その一つが天台宗医王山毛越寺。庭園が有名で、それが浄土思想を具現化したとして高く評価された。

毛越寺は、平安時代の建立。『吾妻鏡』には「禅房五百余宇」と謳われ多くの支院と一体化された、所謂「一山(いっさん)寺院」である。今は支院の数十と、往時とは隔世の感があるが、支院と本坊が一体的に「毛越寺」を形成している、そのありようは今も変わらない。近くにある金色堂で有名な中尊寺も同様の一山寺院である。

毛越寺の支院のひとつ、普賢院は、中世武士団の盛衰と関わりがある。その武士団は寺崎(てらさき)氏という。今も普賢院の住職は、寺崎姓を名乗る。

寺崎氏は、中世奥州の名だたる豪族、葛西氏の門葉であった。その一族として盛期には今の宮城県北から岩手県南にかけて、多くの地を領有していた。



しかし天正十八年(1590年)、葛西氏は豊臣秀吉の小田原参陣の命に応じなかつたため、これを機に戦国大名としての葛西氏は滅亡。葛西氏一門だった寺崎氏も同じ運命をたどった。

二、寺崎家とわが千葉家

武士団としての寺崎氏は滅亡した。だが寺崎当主の血を引く中に、寺崎信覚という者がおり、秀吉に与した伊達家の追及を逃れて毛越寺に潜み、のち出家。そして子の頼覚が、江戸時代初期廃寺となっていた毛越寺一山普賢院を再興したと伝えられる。

寺崎氏が、毛越寺をめざした際に、千葉源左衛門という家臣が付き従ってきた。この者こそ筆者の先祖にあたる。年代不詳ではあるが世情が落ち着いたころ、普賢院の隣地に居をかまえ、やがて帰農した。爾来、寺崎と千葉で苗字は異なるが、筆者の家では、寺崎家を本家とよぶ習わしがあり、後世、筆者の家から分かれた三軒の家は、かような経緯から、寺崎家を宗本家とよぶ。寺崎家の家紋は、当然のことながら葛西氏の定紋の三ツ柏、われわれ分家筋も千葉姓ではあるが、同じく三ツ柏である。なお、筆者の住地も、古の寺院跡との伝承から、明治二十一年(1888年)に自性院

(じしよういん)という名で寺の復興がなされている。

三、寺崎氏のルーツ

寺崎氏の分枝に大槻氏があり、その子孫に、近代的国語辞書の嚆矢といわれる『言海』を編纂した大槻文彦がいる。父の磐溪、祖父の玄沢も高名な学者で、「大槻三賢人」として尊称され、ゆかりのある岩手県一関市(平泉町と隣接)の駅前には、三人の胸像が建てられている。

文彦は、大槻氏が寺崎氏から分かれ、そして寺崎氏が葛西氏につながることに、おおいなる誇りを持っていた。明治四十一年に仙台で発行された平泉の史蹟を扱った『奥州高館沿革志』に寄せた序にはこう記されていた。「大槻にありては葛西氏を第一宗家とし寺崎氏を第二宗家とす」と。

ただ文彦の絶対的な確信とは別として、寺崎氏が葛西氏の出という家伝やら伝承には、近年一部研究者間で問題提起はされてはいた。

伊藤信は、江戸中期、仙台藩に各村の肝入が提出した村内情勢レポートともいふべき「風土記御用書上」における、葛西氏への千葉系諸氏の服属関係を分析して「寺崎氏も本姓は千葉氏だっ

たことになるのではないか。」と記している。(参考文献一)

また入間田宣夫氏は大槻家に伝わる「葛西分流」系図に着目し、寺崎・大槻家の人物に別称「千葉姓」の者が少なからずいること。葛西清重の孫で寺崎氏の鼻祖たる葛西清次が、「下総国印旛郡葛西庄寺崎に城す」との記述を、印旛郡ならば、千葉氏の勢力下にあり、一郡一地頭の原則に従い、千葉氏領内に葛西氏の領地はありえない、として、寺崎氏が当初より葛西一族であるとす

る伝承には慎重な見解を示している。(参考文献二)

四、葛西氏の名望

しかし、寺崎氏に千葉氏の可能性は、史料の中に、あくまでその可能性の痕跡は認められるものの、後世、伝承としてはその流れを形成することはなかった。そうではなく大槻文彦に代表されるような「寺崎氏は葛西氏の分流」という絶対的な確信を支える伝承の方が強固なものとなっていた。それは、いわば「葛西プラン」が、近世を通じて徐々に醸成されてきたからであろう。

葛西氏滅亡後、伊達藩や南部藩に仕えた遺臣たちは、家の存続を担保するた

誇りを持ち、時代を通して、家の由緒を語り継ぎ書き連ねてきた。

また帰農した者の中にも、特にその後名家、旧家と称せられた家では、同じように、相応の矜持をもつて葛西氏家臣としての歴史を子孫に語り伝え、あるいは記録にとどめた。大槻文彦の大槻家などは、その代表例で、帰農したといえ、数か村を束ねる大肝人の職に代々あつて、大槻一寺崎一葛西とつながる系図を、ゆるぎないプライドをベースに作成している。こうして徐々に形成された「葛西ブランド」の結果として、可能性にとどまるといえ、ほのかに見られた寺崎氏のルーツとしての千葉氏の影は徐々に時代の背後に遠くはなれてしまったのだろう。「葛西ブランド」がいかに根強いのか、その現象を窺うことはさして困難ではない。葛西氏の奥州における拠点であった石巻市などは、葛西氏への敬仰の念、今でもただならぬものがある。宮城県立石巻高校の校章と校歌によってそれを知ることができよう。校章は、ズバリ葛西氏の三ツ柏をアレンジしたものだ。三葉には、それぞれ「真実・自立・友愛」の理念を込めているという。校歌にも「三ツ柏」の詞が入っている。石巻高校のみならず、県立石巻工業高校においても、ように校章、校歌に、しつかり「三ツ

柏」は刻み込められている。葛西氏を仰ぐ気ちは、学校現場で今も再生産されているのだ。

ちなみに、わが平泉町では、千葉姓が最も多く、町内の旧家と称される千葉家の伝承には「葛西家臣としての千葉」というのが、少なからずあるのだが、それにもかかわらず、実は日常的に葛西氏が意識されることはまずない。それはひとえに奥州藤原氏百年の黄金文化の余光の中に身を置いているからにほかならない。平泉小学校の校歌は、藤原三代讃歌であつて、葛西氏は出てこない。しかしこうした事例もまた各地域各地方が、それぞれ紡いで織りなして作りあてきた特色豊かな歴史そのものの一面というべきか。

(参考文献一)

『千葉氏関係資料調査報告書Ⅱ』

東北千葉氏と九州千葉氏の動向』

(千葉市立郷土博物館(平成九年))

(参考文献二)

『葛西氏の興亡』

(一) 関市博物館平成二十七年)



三ツ柏紋

多古城郭保存活用会が目指すもの

多古城郭保存活用会

事務局長 小室裕一

『山城の町 多古』

千葉県多古町は、中世城郭いわゆる山城の町といつてよい。単位面積当たり山城存在数、いわゆる「お城密度」でいけば、全国トップクラスの町といつてよいであろう。また、多古町は、千葉宗家にとつては、その終焉の地ともいえる多古城址、志摩城址という重要な城址がある。しかしながら、こういった背景がありながらも、多古町の城址は、あまり顧みられる事がなく、城址に関する整備も、十分には行われてきていなかったという現状があつた。

実は、私は多古町の間人ではない。

東京の企業人として、ある事から多古町に触れることがあり、多古町に魅せられ、定期的に多古町に通うようになった人間である。私は仕事柄、地方を巡ることが多く、土地柄の相对比较ができる人間であると思つているが、この多古町という土地柄におけるマーケティング的エッジ(当該土地柄の強みとなるもの)に関して、何より、この千葉氏の歴史を背景とした山城の多さとその遺構の良

好性こそ、画期的な強みとなるもの、いつも思つてきていた。

『並木城の整備』

多古町訪問の中で、知り合う機会を得、お声がけ頂いたのが、町会議員でもあられた高坂恭子氏(現・多古城郭保存活用会会長)と郷土の歴史を研究される高橋朝子氏(現・多古城郭保存活用会代表)であつた。両氏から、多古町の今後のために、どのような面を伸ばすべきかということ聞かれた時、真つ先に申し上げたことは、この事であつた。お二人はいたく、私の意見に共鳴いただき、特に高橋氏からは、並木地区に関し、長屋門が存在する家屋の多さをお聞かせ頂き、並木城の整備と共に、その点を良さとしてアピールしていきたいという意向が強く示されたのであつた。

この並木城であるが、千葉胤貞の関連城郭であり、従来多古町内では、一番中世期からの遺構の残りが良いとされてきていたが、多くの部分の敷化が進んでおり、見学者が訪れても、全く遺構の多くを確認できない状況にあつた。高坂氏・高橋氏がまず取組まれたことは、並木城のアーヒールのため並木城の正確な縄張図と復元鳥観図を日本城郭史学会理事の大竹正芳氏に依頼し、

作成したことであつた。そしてこれらの作品をもとに並木城の地主の方々に並木城のすばらしさをとかれ、地主の方々と地元のお城好きの人間等が集まり、「多古城郭保存活用会」が本年一月結成され、この事は画期的な会の発足として「千葉日報」にも掲載された。

爾来、敷化していた並木城の各種遺構の草刈りと整備に取組んだ。中でも会員小島氏の活躍は特筆ものであつた。さらに多古城、志摩城、並木城の御城印の発行販売と、矢継ぎ早に手が打たれ、会の資金確保がされた。そういう中で今や並木城は、その素晴らしい中世・戦国期の手つかずの遺構を見学者が、まじかに見る事ができる日本一級の城として、その雄姿の全貌を表したものである。

『城郭保存活用会の意義』

ところで我々の会の名前は「多古城郭保存会」ではなく、「多古城郭保存活用会」である。

この違いに、当会は大きなこだわりをもつている。従来文化財は保存されることだけが唯一の目的であり、勢いそれはコスト行政となり、自治体や住民の負担に過ぎるものでもあつた。日本における文化財行政が進まない

理由の最大の課題がここにあったと我々は考える。

多古城郭保存活用会は、まさにその文化財たる多古町の城郭を活用し、自らの保存の為のコストは文化財自らが稼ぎ出すことを指向する。これはアベノミクスの方向性とも完全に一致するものであり、その施策の一端が前記御城印の発行であった。

多古城郭保存活用会としては、今後も町内の城址の草刈り、整備を進めていくが、その際、この活用と言う視点を常に忘れず、取り組みを行っていききたい。折しも、御城印が結ぶ縁で、千葉県の御城印のデザインを多く手掛ける著名な山城ナビゲーターである山城ガールむつみ氏が当会のアドバイザーに就任しただけのこととなった。むつみ氏が持つ、華やかさを多古の城郭のモチーフとして活用できることは、多古の山城の持つ無骨なイメージをソフト化する何よりの方策だと思われる。

今後はこのイメージ作りも活かし、多古十城として町内のお城をさらに活用し、インバウンド顧客も対象として、一層の多古のお城のメジャー化とその活性化に取り組んでいきたい。

郡上八幡町史

東氏と鷲見氏について

千葉氏を語る会 副会長 鷲見隆仁

皆様、こんにちは千葉氏を語る会の副会長の鷲見(すみ)です。

私の先祖の鷲見氏と千葉氏(東氏)との関係を昭和三十五年に岐阜県郡上郡八幡町役場が出版した郡上八幡町史という町の歴史を記した書物を引用して皆様にお話をしていきたいと思っております。この本は、上巻、下巻の二巻からなり上巻は、原始時代から現代昭和にかけてのこの地域の成り立ち歴史がかかれておりその中の平安時代末期の章よりまずこの地方の豪族であった鷲見氏が記載されております。

このころの郡上八幡は、藤原氏の衰えが見え、武士と呼ばれる豪族が生じて新しい社会の源になってきた。

美濃では、清和源氏氏の流れがもつとも盛んであり、清和天皇の孫、源経基がまず、美濃守となり、その子、その孫と勢力を増大していた。

そのような時、莊園の発達や地方豪族の伸長は、郡上地方にも波及していた。その地方豪族の一つが鷲見氏である。鷲見氏は、藤原家の支流で家名はそ

の居住地である鷲見郷(高鷲村)からなづけられたものである。おもに郡上の北部を根拠地として威勢をふるい、中世に入ってから益々盛んになっていく。

時はかわり鎌倉時代、郡上の地頭は鷲見氏であり、郡上太郎重保(鷲見重保)が鷲見郷を領していた。また、承久三年五月、後鳥羽上皇らは討幕の軍を起こした。北条義時は幕命を諸將に下

し幕府軍は宇治(京都府)・勢多(滋賀県)の戦いで上皇軍を破つて入京し、後鳥羽、順徳、土御門の三上皇を流し、首謀者を切つて京都側に加担した公家や武士の所領三千か所余りを没収してそれを勲功将兵に分け与え、あるいは彼らをその地頭に任命した。この時、鷲見家は、幕府方に加わり戦い、鷲見郷地頭職の安堵状を得た。家保の子、保吉、諸保は弘安八年(一一八五)に大番役に任ぜられた。大番役とは、諸国の武士が交代で上京して御所を警護し、市中を見回る役で武士の義務となっていた。郡上は五つの豪族の勢力範囲に分割されていたが、なかでも鎌倉幕府末期には鷲見郷の地頭鷲見忠保が勇名を響かせていた。二度にわたる蒙古の襲来によつて幕府の財政は窮乏し、北条高時の政治は乱れ、勤王の諸將が諸国に兵を起こした。勤皇軍討伐の幕命を受けた

足利尊氏は、途中反旗を翻して護良親王の令旨を奉じ、美濃国の土岐氏らと共に京都の六波羅探題を攻め落とし、郡上の鷲見忠保も天皇の味方に加わり活躍した。承久以後鷲見氏は家保から忠保までつづき、高鷲村正ヶ洞の対岸に向鷲見城を築いて根拠地となし、現在なおこの山城は平坦部に石垣を残している。

鎌倉武士の名門として当時関東に勢力を誇っていた東胤行(千葉常胤の六男の胤頼の孫)は、承久二年に勲功により、郡上郡山田庄を加領され、長子の行氏を同地に赴任させた。行氏はまず剣村(大和村)の阿千葉山に城を築き、その後四代の氏村までこの地に居住した。これが郡上の東氏の始まりである。東氏が千葉氏の支流であり、この地がその分領だったため部落民が畦(あぜ)千葉と呼んでいた(畦とは分地のことをいう)と呼んでいたものが転じて阿千葉となったといわれている。

山田庄は栗栖郷の大部分を占めその最北部は鷲見郷と称し、東氏は新補地頭として前者を、鷲見氏は本補地頭として後者をそれぞれ支配していた。

東氏村の子東常頭は、勇猛果敢な武人であった。彼は、延元元年八月に地頭鷲見忠保と連合して出陣し、足利尊氏

に所属の土岐氏の軍勢に従い、官方の軍と戦い戦功をたてた。また、彼も歌道に秀で、七首の歌が勅撰に入っている。

東氏と鷲見氏は、隣在する豪族同士共に戦い共に生きてきた。

しかし、鷲見氏は、室町時代に入ると東氏の勢力に圧倒され、その力は弱まり、天文年間に阿千葉城にいた鷲見貞保が、東氏の命令に背いたため、東常慶が鷲見氏討伐の軍を起し、鷲見軍は阿千葉城の上段、下段とに陣を構え死力を尽くして抗戦したが、篠脇城からの軍勢はからめてより城壁を破つて侵入しついに城に火を放つて乱戦となり、貞保は子を老臣に託して逃がしてから兵火の中に自害した。わずかに鷲見氏の末孫として向鷲見(高鷲村)に光保が、尾崎山には、範綱が残存した。

そして、鷲見氏を衰退させた東氏は、その後郡上の覇者になるが、東常慶もまた、自身の婿にあたる遠藤盛数に滅ぼされる。その息子の遠藤慶隆が江戸時代に入り、初代郡上八幡藩主となる。

東氏と鷲見氏と東氏の支流である遠藤氏のその後の歴史を見てみると実に面白い関係がみられる。

遠藤家は美濃郡郡上藩二万四千石を領していたが、元禄二年(1689)に

第四代藩主遠藤常春が謎の死を遂げると、これが家臣団を二分する家督騒動に発展した。跡目を相続した遠藤常久も元禄六年(1693)、七歳で夭逝するに及び、郡上藩遠藤家は無嗣改易となった。しかし藩祖・遠藤慶隆の功績が特に考慮された結果、時の將軍・徳川綱吉は側室・お伝の方の妹と旗本・白須正休の間の長男を、いったん遠藤家の姻戚にあたる美濃大垣新田藩主・戸田氏の養子としたうえで、これを改めて遠藤家に入れて遠藤胤親と名乗らせ、この胤親に常陸・下野で都合一万石を与えた。

こうして旧郡上藩遠藤家とはまったく無縁ながらも胤親が大名に取り立てられたことで、この胤親が元禄十一年(1698)に近江四郡に移封となり、三上藩が立藩した。

若年寄となった第五代藩主・遠藤胤統は、嘉永五年十二月(1853)年2月、江戸城西の丸造営の功績を賞されて二千石の加増を受けた。幕末の方延元年(1860)には城主格に格上げされている。胤統は文久三年(1863年)に隠居し、跡を孫の遠藤胤城が継いだ。胤城は講武所奉行に任じられ、長州征伐などに活躍した。徳川慶喜の代には奏者番に任じられて將軍側近とな

り、佐幕派としての立場を貫いた。このため、慶応四年(1868)一月に新政府から敵と見なされて領地を召し上げられた。しかし同年五月には罪を許されて領地を戻され、翌年六月に三上藩知事に任じられた。胤城はその後明治三年四月十四日(1870年七月三十一日)に藩庁を和泉国吉見に移したため、以後は吉見藩と呼ばれることとなった。

そして、明治十一年正月に名字を遠藤から旧姓の東氏に改名し、華族東胤城と改め、またここに東氏が復活した。また、鷲見氏の子孫の一部は、遠藤家の家として三上に移り住み、三上藩士として遠藤氏(東氏)に仕え、家老職等を代々歴任し幕末まで至るとの記録が残っている。

皆様どうだったでしょうか、今回は、私の先祖の話も交えて歴史の話させて頂き大変、恐縮でございます。

また、現在でも千葉氏のお墓のある千葉市稲毛区轟町にあります大日寺と、私の家は親戚関係であり何か千葉氏とはご縁を感じます。

そして、丸井先生よりこの千葉氏を語る会の副会長を仰せつかったことも古来よりのご縁を感じます。

今後とも皆様と一緒に千葉氏や郷土の歴史を勉強していきたいと思ってお

ります。そして、最後にこのような執筆の機会を下さった皆様に心より御礼を申し上げます。

参考文献一覧

- 一、太田成和編『郡上八幡町史』上巻 八幡町役場、1960年8月
- 二、二木謙一監修・工藤寛正編『国別藩と城下町の事典』東京堂出版、2004年9月20日発行(394ページ)
- 三、竹内理三編『角川日本地名大辞典』25 滋賀県 1184.ページ

藩府県沿革表

霞会館華族家系大成編輯委員会『平成新修旧華族家系大成』下巻、霞会館、1996年。

大日寺と千葉家五輪塔



上総千葉氏と下総千葉氏

会員 永嶋 俊一

一、寿永二年(1183年)広常誅殺後、その所領は在地領主としての私領本宅など一部を除き悉く没収され郡司、下司等の職も没収され、上総武士団は解体した。没収された所領は千葉常胤、和田義盛、相馬貞常、土屋義清、中原親能等に夫々継承され、特に、常胤は上総氏の本貫地玉崎庄、上総国府近傍の市東、市西郡等を継承し、広常の継承者の地位を獲得した。常胤はこれらの所領に平家没官地の九州の所領を加え孫の常秀へ譲った。所謂下総千葉氏と上総千葉氏の成立を見ることとなる。

胤正が文治三年新介を名乗ることとなるが、この時期に胤正の家督相続が幕府により認められたことになる。何故、常胤は胤正又は成胤に上総氏の所領を全て継承させなかつたのかである。常胤は、時流の慧眼が高かつたと思われるので、胤正又は成胤に継承させられた場合、千葉氏嫡宗家の所領が下総と上総に亘り巨大な武士団が成立することになる。幕府・御家人の動向と広常誅殺の関係、上総武士団の動向に加え、常秀に千葉氏の惣領の地位を継承させるという思惑があつたことが考えられる。

さらに、常秀が広常の孫あたることも指摘されており、常秀と上総氏との関係を考えると胤正又は成胤の所領継承より常秀の所領継承が夫々の武士団の統制を容易ならしめることを考えたとも想定される。

二、上総千葉氏と下総千葉氏との関係を見ると、両総平氏の枠組みからは下総千葉氏が上総千葉氏の庶子家となるが、千葉氏の枠組みからは上総千葉氏が下総千葉氏の庶子家という二重構造関係を生じさせている。常胤、胤正生存中は親の教令権により上総千葉氏は下総千葉氏の庶子家として存在していたと考えられる。

正治二年(1200年)常胤は最後の椀飯役を務めその翌年に死亡していることから、常胤生存中は胤正の地位はあくまでも下総千葉氏の家長であり、上総千葉氏を加えた千葉氏一族の統制、惣領は依然常胤がその地位にあつたと考えられる。胤正は常胤没後二年後に没し、この間、胤正が惣領の地位であつたという記述は見当たらない。

常胤は庶子家を千葉氏一族の惣領として軍事動員する力はあつたが、胤正にはその力はなかつたと言われている。新介として千葉氏の家長の地位は継承しても惣領として常胤に代わる地位を確立することは出来なかつた。常胤没後、胤正が、僅かの間であれ、千葉氏の惣領の地位を継承したかは疑わしい。惣領制は常胤、胤正の鎌倉初期時代には族的結合と軍事的組織の側面が強く、①一族伝統精神の中心となり②祖先伝来の文書を保管し③氏神、氏寺の独占化が見られるようになるのは鎌倉後期からである。成胤が頼朝の下文を常胤、胤正より継承していてもこれは下総千葉氏の嫡宗家の家長としての立場からであると思われる。

三、正治元年(1199年)頼朝死後、三浦義澄、安達盛長、岡崎義実が没し、胤正が正治五年(1203年)と、頼朝や幕府創成期以来の有力御家人の死亡と常胤胤正の千葉氏当主の死が同時期に起こり、さらに千葉六党と言われる常胤の庶子家の当主もこの頃には既に没しているため、幕府を始めとして千葉氏にも世代交代と惣領権継承の問題に混乱が生じた可能性がある。千葉氏内部では上総千葉氏が勢力を拡大し常秀は胤正没後の二年後の元久二年(1205年)に大須賀、相馬、東氏を率いて畠山重忠追討軍へ参陣していることから千葉氏の惣領権は常秀が掌握していたと思われる。

常秀は、建久元年(1190年)左兵衛尉、嘉禄元(1225年)下総守、嘉禎元年(1235年)上総介に夫々任官され千葉介の下総千葉氏より官位でも上位に立つ。頼朝は随兵、供奉の条件として①譜代勇士②弓馬達者③容儀神妙を上げたとされる。常秀は、頼朝出御の際は殆ど随兵、供奉人を務めていることから、実力的に相当の者であつたと思われる。

成胤が健保六年(1218年)に没し、嫡男胤綱も安貞元年(1228年)に没することで下総千葉氏の力が相対的に、低下してくる流れとなる。

四、千葉氏は鎌倉時代初期、常胤の力量により幕府御家人のトップの武士団に短期間で成長したが、武士団の惣領の地位と地位継承の手続きが未整備のまま成長した。

当時の武士団は、長子相続も未確立で惣領の地位は母方の勢力、子の能力等によりその地位の継承が行われていた。千葉氏は、常胤生存中はその地位継承は常胤のカリスマ性で行われた

が、常胤、胤正没後は成胤、常秀の間で惣領争いが生じ武士団の二分化を生じさせ、常秀は常胤から上総介と上総氏旧領を殆ど継承することで、成胤が継承した所領を遙かに凌ぐ絶対的勢力を保持したが、千葉氏嫡宗家の表象である千葉介は成胤が継承した。成胤が常秀に相当の妥協を強いられる結果と言える。

この所領の継承と千葉氏の惣領継承は誰が決定したのかという問題がある。所領の継承は常胤生存中に行われているので恐らく常胤が決定し胤正に命じたものではないだろうか。常胤は元々下総から上総への勢力拡大を考え、本貫地も上総への移転を考えていたのではないか。この背景には下総には葛西、常陸には佐竹氏など有力な御家人が存在し、下総一國を支配する

ことが難しく、相馬御厨争論などによる所領問題を若い頃より奔走したことがあり一族の勢力拡大と所領確保を常に考えていたと思われる。加えて、下総より上総の方が国の格としても上位であり官位も同じ権介であつても上位であることから上総への勢力拡大、進出を考えることは当然のことである。

五、広常誅殺による最大の受益者は常胤とされるが、広常亡き後の上総の所領獲得と武士団の統制を常胤が志向し、頼朝参陣も自らの在地領主として所領安堵と拡大を目的としたものであるならば、広常誅殺に常胤も関与していたとしても不思議ではない。

寿永二年は、①七月木曾義仲入洛と平家西国へ都落ち②十月宣旨により東国の沙汰権を得て、これ以後、頼朝は、全国の沙汰権を獲得し武家の棟梁としての地位が全国的に確認され、頼朝の地位が反乱者の立場から正規の地位を得る転換点となる極めて重要な年である。この様な中で③十二月広常誅殺が起きたのである。この時期に御家人の筆頭である常胤はどうしていたのか。源平合戦で彼が属していた頼朝の軍勢が木曾義仲追

討のため鎌倉を発ち十一月中に尾張に着き、翌年一月入洛していることの記事が見られる。

頼朝の計算の中には、同族常胤の不在も入つていた可能性がある。

広常誅殺時、頼朝は一族の常胤を西国へ出陣させ直接の関与を打消しているが、常胤出陣中に常胤に黙つて同族の広常誅殺を実行することは考えにくい。

事実関係はどうであつたのか興味あるところである。

六、常胤は、上総氏所領を継承したときに常秀にその殆どを譲り、常秀を千葉氏の惣領として考え、嫡宗家主の千葉介を直系嫡流の成胤に継承させた。今に言う総・総分離を図り千葉氏の安定化を考えた。

この様な嫡宗家と庶子家の勢力逆転は三浦氏と和田氏の関係にも見られるが、三浦氏一族は和田氏が頼朝の信頼の下、勢力拡大を図つたが、千葉氏の場合は常胤主導の下、武士団の勢力分散による一族存続の途を考えた想像される。

常胤胤正の千葉氏一族の当主の死が同時期に起こり、世代交代と惣領継承の問題が千葉氏武士団の二分化を促し、夫々が独自の路線を展開し

ていくことになる。常胤が上総氏旧領を継承し胤正と常秀にその所領配分を考えたとき、上総、下総の各武士団の対立を憂慮し、胤正に千葉氏一族の惣領権を与えなかつたことが皮肉にも胤正死後に成胤と常秀の間での惣領争いによる武士団の分裂を生じさせる結果となつた。この時期は未だ嫡宗家の長子相続による惣領権継承が確立していなかつたことも大きい。

常秀の嫡子秀胤が宝治合戦で失脚、上総千葉氏滅亡という途を辿り下総千葉氏へ糾合されるまでは、上総千葉氏(庶子家)が下総千葉氏(嫡宗家)を凌駕する存在であり、常秀、秀胤が千葉氏の惣領としての地位を得ていたと思われる。

七、成胤は、元久二年(1205年)飯役を務めると同時に頼朝の下文を幕府に提出し、建暦二年(1212年)所新造の負担を一族に差配し嫡宗家としての威厳を示し惣領としての動きをしている。更に和田の乱、建暦三年(1213年)後、実朝廃位の防止と北条氏への援軍の功績により幕府、一族内で一定の地位を築くことに成功した。和田の乱は、成胤が一法師を北条氏へ差出したことで和田氏による北条氏掃討が露見したことに始まるが、

和田氏は当時幕府内はもとより上総でも勢力を有しており北条氏にとつても有力な対抗者となつていた。成胤は、上総での和田氏の勢力を削ぎ、幕府内での自らの地位を築くことで常秀に對抗しうる力を得ることを考え北条氏への協力を行った。この功績は、幕府内、取り分け北条氏の信頼を得ることに成功したと言える。

幕府はこの乱後、家督を通じて御家人統制を図ることに転換していく。千葉氏でも嫡宗家と庶子家の内部対立が整理され徐々に嫡流が固定化されていく動きとなる。

元久二年(1205年)常秀は、同時期畠山重忠追討軍の後陣として一族を率いており、上総千葉氏と下総千葉氏の力関係は拮抗しているように見えるが、下総千葉氏は一族内で上総千葉氏を上回る勢力を獲得はできず、惣領権は依然上総千葉氏が有していたと考えるのが自然ではないだろうか。下総千葉氏が惣領権を獲得できるのは宝治合戦による秀胤滅亡まで待たなければならぬ。

しかし、宝治合戦後、下総千葉氏は上総千葉氏の所領継承はできず、一部東氏、大須賀氏に継承されたが、上総守護職とともにその殆どは足利

正義が継承した。千葉氏は上総千葉氏没落後、嫡宗家と庶子家の内部対立は解消されたが、下総千葉氏は常胤の時代に比して、その勢力は著しく弱体化し、御家人内部では、北条氏の勢力拡大を許すこととなる。

反面、三浦氏は、和田の乱により当然に嫡宗家と庶子家の内部対立が整理され、一族の統制は嫡流家に固定化されることとなる。

八、嫡宗家と庶子家の対立という構図は、幕府の御家人統制が將軍と庶子家の主従関係が夫々嫡宗家と切り離され成立していたことに起因する。これにより、庶子家は独立、分立による勢力拡大を図り、幕府内で一定の地位を獲得し嫡宗家を凌駕する庶子家も現れ、惣領の地位を巡る一族内の内部対立を招く。

幕府が御家人制度の中で巨大武士団の内部対立を意図して組立て、その勢力を削いでいく途を描いていたかは不明だが、この様な制度は、当然に内部対立を生じさせ、組織統制の弱体化を招き、一族の衰退へと繋がっていくことは自明の理である。

幕府は鎌倉初期から御家人統制には一貫した政策はなく極めて便宜的であり、惣領の統制力は利用するも

御家人増加を図るため庶子家の領地安堵を行うという矛盾した政策を採っている。

しかし、鎌倉後期には、北条得宗家による権力の増大で幕府内の専制化が生じてきたことが、武士団の中に、惣領権は、政治権力との関係を意識するように変質させ、さらには各武士団にも戦闘、狩猟の習慣、習俗が色濃く残っていた鎌倉初期からは、理性により行動する道徳観が自覚されるようになってきていた。

九、この様な背景の中、千葉氏は各武士団の結合を図り、他の武士団に先駆けて一族の組織統制強化のため嫡宗家の長子相続を行い、さらに妙見信仰を中核とした説話手法を用いて嫡流の一族統制の正当性と権威付けを行い、源平闘静録等の出現を図ることにより一族の結束を再構築したものと考えられる。

しかし、千葉氏一族内部の争いはその後も続き、一族の歴史は内部抗争の歴史となり、やがて一族の衰退、滅亡へと繋がっていった。

(了)

お知らせ

この度、千葉市中央区千葉寺町にある千葉市社会福祉協議会のボランティアセンターに登録しまして、協議会の施設を利用することが出来るようになりました。当面は会館内の施設(講演会・勉強会等の会場)と印刷機の無料利用が出来ることになりました。会報の印刷にも便利になりますが、又同協議会の行事にも参加出来ることもあるかと思えます。本会の活動に利用したいと思います。

編集後記 編集子

大変遅くなりましたが、会報十号をお届けします。今月号では、本会の会員でもあります岩手県平泉町の千葉亮将様が投稿されて下されました。お伝えします。今後とも益々本会の活動に御協力頂ければ幸いです。本年も会員一丸となって、本会の設立趣意書に乗っ取り、各々の事業を確実、誠意を込めて推進し、会員の納得を得られるように会の運営を進めて参りたいと思えます。どうか会員皆様の御協力をお願い致します。